

# まちづくりビジョン策定委員会（第13回）会議録

■ 日 時：平成26年7月4日（金）午後2時30分～午後4時50分

■ 場 所：みなかみ町観光センター 2階 第1会議室

■ 出席者：

①まちづくりビジョン策定委員会（7/13名）

小林 洋、小野 章一、津久井 功、持谷 美奈子、渡辺 一彦、高橋 直也、  
鬼頭 春二

②アドバイザー（1/1名）

平松 庚三

③事務局（2/3名）

まちづくり交流課 商工振興GL 小池 俊弘、主査 大川 志向

■ 配布資料

資料1 各分野の問題点と改善案

■ 会議内容

---

## 1 開会

## 2 議事

### (1) 観光分野における問題点と改善案について

- ・複数の観光関連団体（観光課、観光協会、旅館協同組合など）がそれぞれ独自に販売促進活動をしており、投資対効果が低い。組織がたくさんあって、ショットガン方式でやることは悪いことではないが、グループウェアやSNSを活用したり、定期的な会合を開催したりして、団体間のコミュニケーションを活性化させるようなネットワークを構築できないか。次回の観光部会では、各団体にどのように働きかけ、どのような仕組みを構築するか、その実行案を検討する。
- ・町内に多くの観光関連サイトがあり、情報の量と質にばらつきがある。顧客にとって、情報過多に起因する情報不足が生じている。各団体の役割が不明確で、同じ土台で同じことをしてしまっている。顧客を県内に連れてくることは県の仕事であって、町内に連れてくるのが町や観光協会の本来の仕事。現状は、各事業者が独自に県外から誘客しているので、効率が非常に悪い。旅行会社などの外部資源を活用して、集客する戦略を構築してはどうか。町はバックアップ機能を強化し、各サイトへの閲覧者数を増大させることに専念すべきである。
- ・本町の強みは、町内に18の温泉地が点在する事であるが、それぞれの温泉地が独自のマーケティング、訴求をしているため、みなかみ温泉の統一イメージが希薄化している。さらに「みなかみ」と「水上」の混在で市場に統一されたイメージが伝わりにくい。それぞれの温泉地の個性を活かして、個別ブランドを差別化しつつ、一体化させたグループブランド（みなかみ18湯）を構築し、全体のイメージを強化したい。

## (2) 農業分野における問題と改善案について

- ・地場産業を振興させ、雇用を増やし活気ある町をつくるために、持株会社である農業法人を設立する。新たな試みとして、町外の農業ベンチャー（新規就農者）を誘致・育成することで、経営基盤を強化していく。
- ・法人を設立するうえでの課題は、資本政策や地主の権利を担保した農地集約、新規販売経路の開発などで、今後、部会を中心に検討していく。法人の機能は、加工施設・大型農機の一元管理や資材の一括購入によって農家の経営効率を向上させたり、販売経路開発や販売管理によって供給を安定させたりすること。また、雇用を安定させるための労務管理、農地の管理や耕作放棄地の復元、経営や栽培指導も行う必要があるのではないか。生産は既存農家や農業ベンチャーが行って、自由競争とすればよい。
- ・担い手への農地の集積を目的として、貸し借りを仲介する公的な組織（農地中間管理機構）が本年4月に県単位で設置された。信頼度が増して、農地の貸し借りが円滑になる可能性がある。
- ・農業ベンチャーが参入しやすいような仕組みを構築する必要がある。例えば、農業機械の貸し出しは無料として、売り上げの1割を徴収するとすれば資金がなくなるとも参入しやすい。また、親会社がバクアップ機能をもって、経営や栽培の指導をしたり、果樹であれば予め樹木を育てておいたりしてもよい。
- ・耕作放棄地を活用してどのような農作物を生産するのがよいか。また、どこをターゲットとして販売すればよいか。アジアは中間層が増えてきて購買意欲も向上しているし、TPPによって果樹は最大のチャンスではないか。物流の合理化も進んでいるので輸出も可能である。
- ・冬場の雇用として、例えば果樹の苗木を養成したり、農産物を保存しておいて加工工場をフル稼働させたりできる。今は短期間でも手伝いに来てくれる人がいるからよいが、冬場の仕事ができれば通年で雇えて雇用が安定する。
- ・農産物がおいしいのは当然で、市場が求めているのは安心・安全だと思う。安心・安全であることを訴求するための安全協会を設立し差別化を図ってはどうか。食の問題はオープンではないことなので、使用した農薬や肥料（基準を守っていること）をオープンにし、協会でそこに記載されている生産工程や流通経路は正しいということを保証する。また、農薬や肥料について可能であれば、国や県よりも厳しい町独自の基準を設けてはどうか。糖度や食味などは自由競争でやればよいし、農業事業者間の足並みも揃えやすいと思う。
- ・ビジョンの目的は若い人を町内にいれようと言うわけであるから、専業農家を育てるという考え方だけではなく、自分の家族・親戚が食べられる程度の農業を営む兼業農家を受け入れてはどうか。都会にはそういう生活を求めている人も多いのではないかと。買った方が安いかもしれないが、自分で作った米は安心感が一番強い。また、年収が低くても食べるものがあれば生きていける。移住者に農地を提供したり、賃金・給与以外に経済的利益として農地を提供（＝フリンジ・ベネフィット）したりしてもよい。
- ・新たなビジネスモデルとして、手ぶらでできる農業体験もおもしろいのではないかと。都市部では子ども向けの職業体験施設や区民農園などが人気である。

## 3 次回委員会の開催について

- 次回の委員会について、次のとおり日時と場所が決まる。

日時：7月18日（金） 午後2時30分から

場所：観光センター 2階 第1会議室

## 4 閉会